



浦島伝説

令和4年11月1日

第23号

読書の前後で、何かが変わる

「図書館だより」第10号でお知らせしたように、毎年10月27日～11月9日は読書週間です。各分野で一流になった人々が共通に語るの、ある時期に集中してその分野の本を片っ端から読みあさったということです。例えば世界一の企業を目指しているソフトバンクの創業者、孫正義さんは、病気で入院中に読書に励み、歴史物、コンピュータ関連書などを手当たりしだいに4000冊読んだと言われています。その圧倒的な読書量が、現在の驚異的な成功につながったそうです。一般には、一つの分野の本を100冊読むと一人前に、300冊読むとその分野の専門家になれると言われています。

数年前、オバマ前アメリカ合衆国大統領やビル・ゲイツ（マイクロソフト元会長）が絶賛した「ファクトフルネス（FACTFULNESS）」という本が世界の多くの国でベストセラーになりました。この本の最初に、2017年に世界14ヶ国の約12,000人に行った13問のクイズが出てきます。そのうちの4問を紹介します。

No. 2 「世界の人口の大部分が住んでいるのはどこでしょうか？」

A：所得の低い国、B：所得が中くらいの国、C：所得が高い国

No. 3 「世界の今の平均寿命は？」 A：50歳、B：60歳、C：70歳

No.12 「世界で少しでも電気を利用できる人はどれくらいいるでしょうか？」

A：20%、B：50%、C：80%

No.13 「世界の気候の専門家は、これからの100年で、地球の平均気温はとなると考えているか？」

A：暖くなる、B：変わらない、C：寒くなる

全問A・B・Cの3つの中から正解を選ぶようになっており、中学生でも簡単に答えられます。クイズの内容は貧困、人口、教育、環境など、みなさんが社会科等で学習するようなことで、決して難しいことを尋ねられているわけではありません。私は13問中、2問しか正解できず、かなりショックを受けました。しかし、読み進めていくと、正解者数が突出して多かったNo.13を除いた12問の平均正答数は、わずか2問、満点はゼロ、全問不正解が約1,800人（15%）だったことが分かり、安心しました。

驚いたのは、このクイズに答えた人々は、大学教授、有名な科学者、投資銀行員、世界中で有名な会社の重役、ジャーナリスト、政治家など「エリート」と呼ばれる人々だったのです。なぜこのような結果になるのか。この本では、その理由として、私たちが自分でも気付かない「10の思い込み（本能）」があること、学校では古い時代遅れの統計データで学んでいること、マスコミの特徴などによることを指摘しながら、分かりやすく解説してくれます。

この本を読んでから、私はニュースや情報番組等の見方が変わりました。テレビ・新聞・ネットなどを見ると、世界では兵器を使った紛争がなくなり、貧困、格差、テロ、自然災害などが毎日のように報道されています。世界はどんどん悪い方へ向かっているような印象を与えてしまいます。最新の正確な統計数値で見ると、世界はどんどんよくなっているのにもかかわらず、大多数の人が、世界はどんどん悪くなっていると思いこんでしまうのです。その原因の1つは、テレビ・新聞・ネットなどは、人々の興味・関心を引かなければ商売にならないからです。よいニュースより悪いニュースの方が、人々の興味・関心を引きやすく、より広がりやすいです。特に、ニュース・記事の見出し（タイトル）は、少し大げさでインパクトがなければ、見たり読んだりしてもらえません。ちょっと何か不満を言うだけで、「かまいたち、ペコパに文句を言う」ではなく、「かまいたち、ペコパにブチギれる」となります。また、人口10万人の町を台風が通り抜け10人が死傷したという事実を伝える場合でも、見出しには「10人死傷」という文言が入るはずですが、「9万9,990人が無事」と書かれることはありません。

読書の前後で、知識、自分の心や感性が変化することは確かです。それまで知らなかったことを知っているのはもちろん、新しい見方・考え方、感じ方が生まれます。

三観地区新人大会の記録

サッカー（10月29日）

2位 諺問 0 - 0 中部

PK 2 - 4